

中学校

平成 8 年 度

教育研究員研究報告書

道	徳
---	---

東京都教育委員会

平成8年度

教育研究員名簿 (道徳)

分科 会名	区市町 村名	学 校 名	氏 名
第 1 分 科 会	江 東	大 島 中 学 校	清 水 寿 之
	大 田	東 調 布 中 学 校	松 浦 之 康
	杉 並	高 井 戸 中 学 校	大 野 三 知 男
	板 橋	向 原 中 学 校	◎ 池 田 俊 一
	足 立	上 沼 田 中 学 校	宮 澤 一 則
	葛 飾	大 道 中 学 校	郷 原 眞 子
	田 無	田 無 第 一 中 学 校	渋 谷 史 朗
	あきる野	西 中 学 校	○ 丹 下 知 男
第 2 分 科 会	世 田 谷	桜 木 中 学 校	大 山 正 順
	渋 谷	笹 塚 中 学 校	勝 野 能 光
	練 馬	豊 玉 第 二 中 学 校	田 村 和 夫
	江 戸 川	葛 西 第 二 中 学 校	沢 田 秀 夫
	八 王 子	恩 方 中 学 校	○ 内 野 雄 史
	立 川	立 川 第 四 中 学 校	高 田 幸 男
	三 鷹	第 二 中 学 校	久 保 田 隆 夫

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部主任指導主事 富 山 謙 一

研究主題

人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導

目 次

I	研究主題設定の理由	2
II	内容項目3-(2)「生命の尊重」についての指導(第1分科会)	3
1	主題設定の理由	3
2	研究の内容と方法	4
(1)	内容項目3-(2)のとらえ方	4
(2)	各学年の指導のねらい	5
(3)	生徒の実態把握	6
(4)	指導の工夫	6
(5)	指導事例	8
3	まとめ	12
	資料	13
III	内容項目1-(5)「個性の伸長」についての指導(第2分科会)	14
1	主題設定の理由	14
2	研究の内容と方法	15
(1)	内容項目1-(5)のとらえ方	15
(2)	各学年の指導のねらい	16
(3)	生徒の実態把握	17
(4)	指導の工夫	17
(5)	指導事例	18
3	まとめ	23
IV	まとめと今後の課題	24

人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道德の時間の指導

I 研究主題設定の理由

多様化する価値観の中で

現在、国民の生活は便利になり、物質的にも恵まれて、ほとんどの人が中流以上の意識をもっていると言われる。その豊かさの中で様々な考え方や生き方が生まれ、価値観はますます多様化の傾向にある。この社会を心豊かに生きていくためには、いろいろな価値観をもった人とかか合いながら共に生きることでできる資質や能力を育てることが求められる。そのためには、生徒一人一人が自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断できるよう自己の考えを確立するとともに、他の人の存在や価値観を認めることでできる資質を伸ばしていくことが大切である。21世紀を生きる人間として、生きる力を身に付けた豊かな人間性を育てていくことが、学校教育の最も重要な使命である。

生徒たちの現状

価値観の多様化する社会の中で育ってきた生徒たちは、様々な課題が生じている。情報の氾濫がいろいろな考えを促し、核家族化が幅広い年齢層の人々との生活体験を減少させ、物質過剰の使い捨て時代が物を大切にする考えや感謝の気持ちなどを失わせている。そのため、自分がどんな価値のある人間なのか、また、どんな価値のある人間になりたいのかといった、「自分探しの旅」に混乱をきたしている。しかし、逆に多様化の時代は、生徒たちにとってどの方向にも進路を向けやすいということもいえる。中学生という発達段階からして生徒たちは今、混乱と動揺の中にいるが、自分の中に光る個性を発見し伸ばしていく積極性と自分とは異なる多様な価値観を受け入れる広い心を共に獲得して欲しいと思う。

豊かな人間性を育てる

多くの課題を抱えている中学生ではあるが、すべての生徒が自己を深く見つめ、自分の人生をよりよく生きたいとする内からの願いも強くもっている。教師はこの願いをくみとり、生徒が主体的に自己実現しようとする態度を育成できるよう指導・援助していくことが重要な課題である。

問題をよりよく解決していく資質や能力を育てるとともに、自ら律しつつ他の人と共に協調し、他の人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性を育てることがこれからの時代に生きる生徒にとって大切なことである。学校教育の中で豊かな人間性を育てる指導の要となる道德の時間の果たす役割はこの他大きいといえる。

研究の方法

上記の課題にこたえるために研究主題を「人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道德の時間の指導」と設定した。そして、第1分科会は『主として自然や崇高なものとのかわりに関すること』から内容項目3-(2)「生命の尊重」を、第2分科会では『主として自分自身に関すること』から内容項目1-(5)「個性の伸長」をそれぞれ取り上げた。各分科会では、内容項目の検討、生徒の実態把握、指導資料の収集と分析、指導過程や指導方法の検討等を研究授業における生徒の反応を参考にしながら研究・協議し、生徒の心に響く道德の時間の指導の在り方を求め授業の改善・工夫をすることによって、研究主題に迫ろうと考えた。

Ⅱ 内容項目 3-(2) 「生命の尊重」についての指導（第1分科会）

1 主題設定の理由

生命軽視の風潮

我が国の経済水準が上昇したことにより人々の生活が物質的にも豊かになった。そして、核家族化や少子化が進み、医学が急速に進歩したため、生命の誕生や死を身近に感じるようになってきた。これは、生命の神秘性や生命の尊厳に対する感覚を鈍らせ、いじめ問題にも見られるように、他の人の心と体を平気で傷付けるようなことにもつながっている。

ゆとりの減少 一人遊びの増加

幼少の頃からの詰め込み教育にも拍車がかかり、生徒たちの習い事に費やされる時間も年々増えてきている。そのため、生徒たちは時間ばかりか、心のゆとりさえもなくしている。そして、テレビの一人一台の時代の到来やテレビゲームの普及は、一人でも手軽に遊べる楽しさを子供たちに覚えさせた。それは、友達との心の交わりをもつ機会の減少にもつながっている。テレビなどでは結果は自らが作るものではなく、作られていくのを傍観するものであるといえる。そのため、自分の感情を言葉や身体や行動を通じて表現する場面も減少してしまうのである。

問題解決能力の低下

一人っ子家庭が多くなったことにより、親の子育ても過保護になってきた。親は、子供に対し、勉強が最も大切と考え、家庭内での役割分担さえ与えなくなっている。見方によっては、とても恵まれた状況で生活しているように見えるが、他方では体験を通しての問題を解決していく能力さえも低下させている。このことが、人間関係のトラブルとして起こるいじめなどを発生しやすくしているとともに、起こった問題をよりよく解決していこうとする力を弱めている。

生への価値の発見が いじめ・自殺の解決へ

中学生の時期は、心と身体の成長のアンバランスから、ともすると感情にまかせた行動をとることもある。また集団からはずれた行動をとることにより、自分に被害が及ぶことを恐れ、仲間外れやいじめの傍観者として見過ごしてしまう場面も少なくない。これは、他人に対する思いやりの欠如や、生命軽視の風潮が大きく影響していると考えられる。

生徒を取り巻く社会的な背景や、中学生の発達段階を考えたとき、生きていることに感謝の念をもち、人間らしく精一杯生きていくことに価値を見いだすことは大切なことである。さらに、お互いが支え合って共に生きていくことが、現在、社会問題とまでなっているいじめや自殺をなくすことの糸口になると考えられる。

人間としての生き方を求めて

「生命」とは、何ものにも代えがたいものであり、その神秘性に畏敬の念をもつとともに、すべての生命の尊厳に気付くことがある。そして、生命を大切にしたい生き方が他の者の苦しみを理解し、互いに助け合って共に生きていこうとする力を与えてくれるものである。以上のことから、第1分科会では、「人間としての生き方の自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導」として、内容項目 3-(2)「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重するようにする」を取り上げ、内容項目のとらえ方、生徒の実態把握、資料の収集・検討・指導方法や指導過程等の工夫について研究を進めることにした。

2 研究の内容と方法

(1) 内容項目3-(2)のとらえ方

生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重するようにする

生命の体験を心に植える

中学生期の生徒の心は激しくもろい。精神的な疾風怒濤の時代とも言われるように、ともすると極端に走りやすく、このことは生命に対する考え方にも見られる。路上の虫も踏まない優しい気持ちがあるかと思えば一方で、「いじめ」にも見られるような、思いやりのなさが同居することもある。

さらに、テレビゲームなどの擬似体験の氾濫は、生への慈しみや死への嫌悪を軽い感覚にしている。さらにマスコミのあつかう安易な神秘体験・生まれ変わりの話なども自他の生命をないがしろにする風潮を生み出す作用をしてはいないだろうか。本来、生は崇高なものであり死は忌避するものである。このことを理解するためには、発達段階に応じて「生命の尊さ・いとおしさ・温もりといったことを肌を通して感じられるよう体験を通して」学ぶ必要がある。

生命のかかわりを学ぶ

人間は一人では生きていけない。青年期に入ろうとしている生徒は、様々な壁にあたる度に、このことを実感することになる。日々の生活や学習の課題の一つ一つを解決していきながら、他と協力することの大切さを知る。目標の達成、行事の成功、あるいは挫折の悔しさなどを経て、相手の立場を尊重することの重要さや、話し合いのルールなどを多くの仲間の中で経験する。これらの人間同士のかかわり合いを通じて「生きているって素晴らしい」という感動を伴った実感が一人一人の生徒の胸にわくような指導を工夫したい。

生命を守ろうとする意欲を育てる

以上のように生命の尊さをとらえた上で、これをイメージ化したものが図1である。この図の中には次のような願いが込められている。

地球上のありとあらゆる生きとし生けるものの生命を謳歌し、互いに学び、人と触れ合い、自分を表現するなど、様々な体験、経験を通じて、生きる喜びを感じて欲しい。

さらに、生命の大切さを「自分の命を自分でがんばる」とともに「自分の生が他にも励ましを与えている」ととらえ、お互いが支えあって生きている事に気付かせたい。

そしてどんなにつらい事に出会っても、それを乗り越え、生命をかけがえのないものと考え、これを賛美し勇気をもって守ろうとする意欲をもってもらいたい。

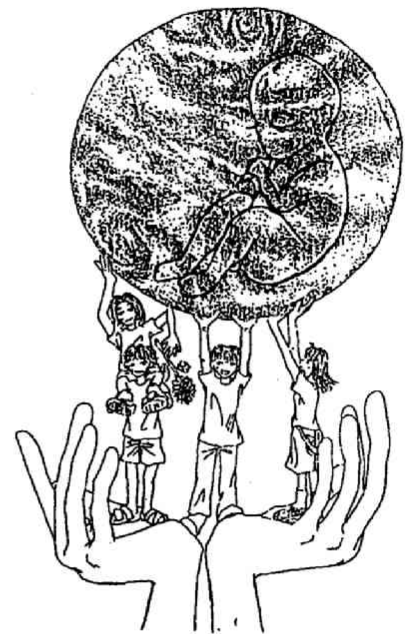


図1 生命の尊重のとらえ方

(2) 各学年の指導のねらい

－第1学年－

自他の生命の大切さを深く自覚するとともに、互いの存在をかけがえのないものとしてとらえようとする心情を育てる。

毎日の生活の中で生徒はともすると、生きることの素晴らしさを忘れがちになる。さらに、いじめを恐れ多数主義的な考えに流されることもあり、友達に対しての思いやりのなさや自他の生命を軽視する風潮もある。そこで、生命の有限性を実感し、人間としての生き方や互いに支え合って生きていくことの大切さを理解することが大切である。

〈資料例〉「僕は眠らない。智君の青春」ニッポン放送

「へその緒」 (中学校 (道徳) 読み物資料とその利用 3 文部省)

－第2学年－

生きているものすべてに目を向け、生命の不思議さや素晴らしさを感じとろうとする意欲を育てる。

都市型の生活の中で育った多くの生徒は、自然と触れ合う機会も乏しく、生命の神秘さや素晴らしさに感動することも少ない。そこで、「生命」を人間だけに限らず、生きとし生けるものすべてに広げ、命あるものの素晴らしさや神秘性に気付くことが大切である。

〈資料例〉「牛のお産」 (中学校 (道徳) 読み物資料とその利用 3 文部省)

「ミハイルの夢」 (中学校 (道徳) 読み物資料とその利用 3 文部省)

－第3学年－

生命の尊さを理解し、自己実現のために人間として望ましい生き方を実践しようとする態度を育てる。

この時期は、進路選択に対しての意識も高まってくる。しかし、自分の利益を求めあまり他人の感情を無視したり、命を粗末に扱う場合もある。そこで、生命尊重の精神を人間形成の基盤とし、思いやりの心をもち互いに支え合いながら有意義な人生を築こうとする態度を育てることが大切である。

〈資料例〉「たとえぼくに明日はなくとも」

(中学校 (道徳) 読み物資料とその利用 3 文部省)

「生きがいを求めて」

(中学校 (道徳) 読み物資料とその利用 3 文部省)

(3) 生徒の実態把握

学級担任が、クラスの生徒一人一人のよさやその芽を的確に把握することによって、「生命の尊重」についての意識を深めていく授業ができるのではないかと考えた。その手立てとして今回は、座席表を活用することにした。この座席表には、事前に生徒の意識や行動傾向などを、加点的発想で記入しておいた。情報を収集するに当たっては、生徒一人一人の「より多くのよさ」を集めるという趣旨から、多くの先生方にも協力してもらうことにした。そしてたくさんの情報から、今まで担任が気付かなかった生徒のよさを知ることができ、生徒を目の前にして新鮮な気持ちで授業に臨むことができた。

また、授業においては意図的な指名に役立て、生徒からの意見・感想に対して、その生徒の学習状況に応じて生かすよう指導・援助を展開することができた。

生徒の意識や行動傾向	
S 1	友達思い。思慮深い。よく気が付く。優しい。仕事熱心。
S 2	正義感が強い。周囲に左右されない。落ち着きがある。
S 3	明るく素直。真面目。思いやりがある。誰とでもなかよくできる。
S 4	礼儀正しい。冷静に判断できる。集中力がある。一生懸命に取り組める。

1年C組座席表

		A	B	C	D	E	F	G	H
		素直 協力的 細かい気配りが できる サッカー ◎	真面目 おとなしい 穏やか	コツコツと努力 する 仕事がいねい バスケ部	明るい はっきりして いる 責任感が強い 負けず嫌い	友達思い 思慮深い 気が付く 優しい 仕事熱心	落ち着いている 穏やか マイペース	明るい 発言できる 大きな声で歌 える ムードメーカー	素直 友人が多い 優しい 班長 バスケ部
I	J	K	L	M	N	O	P	Q	
友達に優しい 真面目 マイペース	好奇心旺盛 明るい 積極的 班長 バスケ部	行動的 個性的 テニス部	周囲へ気配りが できる 発言が多い 責任感が強い 仕事熱心	声が大い 自分の考えを 言える ひらめき◎ 学級委員	冷静 優しい ねばり強い 仕事がいね い	仕事がいねい 明るい 落ち着きがある 学級委員	明るい 友達をまとめ 指示を出せる テニス部	ものおじしない 几帳面 トランポリンに 熱心	

(4) 指導の工夫

① 資料選定の観点・内容

第1分科会では、中学校指導書道徳編（平成元年3月 文部省）に示された内容の中から「生命の尊厳に気付かせる」とともに「人間としてどう生きればいいのかについて自覚を深めさせる」ことを中心として扱うことにした。また、1時間という道徳の時間の中で、生徒たちに新鮮な感動を与え、心を大きく揺さぶることができる内容のものを使用したいと考え、以下の諸点を満たすような資料を選定することにした。

- (ア) 新鮮な感動を与え、心を大きく揺さぶるもの。
- (イ) 内容が難しくなく、生徒にとって理解しやすいもの。
- (ウ) 内容が生徒たちの生活から、かけ離れていないもの。
- (エ) 死との対比ではなく、生きることを主体的に扱ったもの。

以上の観点から多くの資料を検討した結果、ニッポン放送より平成4年にラジオ放送されたドキュメント「僕は眠らない。智君の青春」を資料として選定した。

② 授業の構想

今回の研究では、「命とはかけがえのない大切なものである」ということを中心に取り上げ授業を展開していくことにした。まず「命の尊厳」について気付かせ、そこから「命を無駄にせず大切に生きていく」ことを考えさせる。そして、考えた内容を普段の生活で生かしていくような道徳的実践力を身に付けさせることを目的としている。つまり、「人間としての生き方について自覚を深め」「主体的に生きる力を育てる」わけである。授業を構想していく上で、生徒に理解して欲しいことは「命の大切さ」であり、また、そこから生まれてくる「命を大切にした生き方」である。この二つを柱に、いかに授業を展開していくか考えた。今回使用した資料は、読む者にかかなりの感動を与えるものである。そこには、二十歳で幕を閉じた智君の生きざまが記されている。アイバンクの角膜提供登録を行ったり、病気を治すロボットを作ろうとしたり、その行動から智君の願いや夢が伝わってくる。ここで注意したいことは、死を美化しないことである。亡くなったための保険金から音の出る信号機が設置されたが、死ぬことによってよい結果が生まれたと考えて欲しくないのである。また、病気になったからこのような行動をとったとも考えて欲しくないのである。病気を治すロボットを作ろうとしたのも、生きることへの強い執着があったからととらえたい。

生徒たちは、鳥や虫にも命があることを知っている。しかし、鳥を抱いたときの暖かさや鼓動から命の温もりや響きを感じ、虫を捕まえたときの羽ばたきから命の躍動を感じるという経験をした者は少ない。「命」は知っていても「生きる」ということをまだ十分に感じとっていないのである。この授業を通し、鳥や虫から伝わってくる命の躍動感と似たものを体験し、「生きる」ということ、「命はかけがえのないもの」ということが生徒の心に響き渡り、「命を大切に生きていこう」とする気持ちが湧いてくるようになって欲しいと考えた。

③ 指導方法と指導の工夫

指導上考慮した点は、「資料を読んだときの感動をいかに薄れさせずに授業を展開していくか」「生徒から多くの考えや意見を吸い上げるにはどうしたらよいか」「生徒の心に直接伝わるような発問はどんな発問か」ということである。以上の点に配慮しながら、以下の導入から終末までを考えた。

(ア) 導入における工夫

導入では、「かけがえのないものとは何か」と生徒に発問することにより、生徒の興味・関心を引きながら、これから学ぼうとすることを自然に知らせる方法を考えた。これにより、生徒の発言から中学生が認識している、かけがえのないものの程度も把握できる。ここで教師は、生徒の発表をあるがままに受けとめるよう心がけた。

(イ) 展開における工夫

先にも述べたが、読む者にかかなりの感動を与える資料なので、その感動を薄れさせることなく展開することを考えた。そのため、発問の内容も生徒の言葉で表現し、自然に発問内容が伝わるように工夫した。また、基本となる発問数が多いと生徒の感動が薄れたり、思考がとぎれたりすると考え、発問も最小限におさえた。そして、生徒自身が考

える時間をできるだけ多くとるようにした。したがって、最初の発問も「最も心に残ったところはどこか」という内容にしばり、さらに生徒の言葉に直し「一番心にジーンときたところはどこか」という言葉に変えた。これにより感動したところを振り返り、生徒が自分でその内容に迫るという方法をとった。つまり、生徒一人一人が実感しているそれぞれの角度で命の大切さをとらえられるよう考えた。

二つめの発問が主発問となるが、智君の行動や心情から導かれる主体的な生き方を「命を大切にした生き方ってどんな生き方だろう」と投げかけることにより資料から離れ、自分に照らし合わせて各自で考えるようにした。じっくりと考えることから道徳の実践力が養われることをねらいとしている。資料で高まった感動をもとにしながら、命を大切に生きていこうとする心情や意欲を育てる方向へと導くのである。

どちらの発問に対しても、まず自分の気持ちや考えをまとめさせて文章化し、その後、発表させる。この結果、多くの思いや考えを表現し、さらに互いに交換し合うことができる。また、発表できなかった生徒からも書き記したものを集めることにより意見が吸収できる。発表に対しても、「それについてどう思うか」とか「先生もそう思う」等、内容によってはさらに掘り下げたり、生徒の意見に対し共感したり受容したりした。しかし、生徒自身がしっかり考え、気付くことがねらいなので、生徒同士で議論をしたりグループで話し合ったりということは敢えて行わなかった。

なお、授業の実施に当たり、ラジオ放送を録音したテープを聞かせながら同時にプリントを目読する方法をとった。これにより、生徒は臨場感をもってスムーズに資料の世界にひたることができる。また、読み手の力量はもちろん、効果ある音響や母親の声により、さらに資料に入り込めるものと考えた。

(ウ) 終末における工夫

「この授業を受けて、感じたこと考えたことを自由に書いてみよう」という教師の指示で各自がこの授業の感想を書く。この作業により授業を振り返り、「命の大切さ」「命を大切にした生き方」を自分なりに再確認するのである。書いたものは後に、道徳だよりに掲載して紹介する。

(5) 指導事例（第1学年）

- ① 主題名 生命の尊重〈内容項目3-(2)〉
- ② 資料名 「僕は眠らない^{さとし} 智君の青春」(録音テープ)
(ニッポン放送「青春放送局ミニドキュメント」)
- ③ 主題設定の理由

中学校の段階では、生命は尊重されなければならないものであることは誰でも観念的に分かってはいるが、まだ、十分に生命の尊厳に対する理解が深まっているとは言い難い。

日常の生活の中でも核家族化や少子化などが進み、「死」や「病」に接したことがない生徒が大多数であろう。それは、「生」に対する感謝の気持ちや「生命」の崇高さを実感としてとらえる機会が乏しいということにもつながっていく。

そこで、不安定ではあるが、感受性が豊かなこの時期に、生命はかけがえのないものであり、人生は一度だけの貴重なものであることを理解させ、それをふまえた上で自分

がこれからの人生の中で、どう生きていくべきなのかを自覚させたい。

以上のような理由から、本主題を設定した。

④ ねらい

- ・命の大切さに気付く。
- ・一生懸命生きることの大切さを考える。

⑤ 指導過程

	学習内容と主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点（評価の観点）
導 入	1 本時の授業内容の説明を聞く。 ①「自分自身にとってかけがえないものは何ですか。」考えを発表する。	○本時の内容に興味を示す。 ・友達、家族、自然、心、愛、空 気、お金、親、愛、平和。	○「かけがえないもの」を「一番大切なもの」と言い換えてもよい。 ○いろいろな生徒に発表させる。 (授業に対する心構えができたか。)
展 開	2 資料を配布し録音テープを聞く。 3 ワークシートにそって次の内容を考える。 ②「心に一番ジーンときたところはどこですか、また、どうしてそのように思ったのですか。」自分の気持ちや考えを発表する ③「どのような生き方が命を大切にされたかと思えますか。」自分の考えを発表する。	○真剣に聞き入る。 ・アイバンクに行ったこと。 ・成人式での智君の様子。 ・成人式での母親の態度。 ・夢の実現に向け頑張っている姿。 ・周りを気遣う様子。 ・二度の涙を見せた時の心情。 ・一生懸命生きること。 ・自他共に思いやること。 ・悔いを残さないこと。 ・満足のいく生き方をすること。 ・夢や希望をもって生きること。	○テープを聞いた後、余韻を残しながら、ワークシートを配布する。 ○各設問は模造紙に記載したものをその都度提示する。 ○録音を聞いた直後の気持ちを大切に する。 ○机間指導をして生徒の書いた内容を把握し、様々な意見を発表させる。 (真剣に課題と取り組んでいるか。) ○机間指導をして生徒の書いた内容を把握する。 (命の大切さが感じとれたか。) (一生懸命生きていこうとする姿勢が生まれたか。)
終 末	4 本時のまとめをする。 ④「今日の授業で感じたこと、考えたことは何ですか。」自分の考えを発表する。	○授業を振り返って、自分の考えをまとめる。 ・命の大切さ、素晴らしさ。 ・何事にも一生懸命取り組むこと。 ・自他共に大切にすること。	○なるべく多くの生徒に発表させる。 (命を大切にして、日々を充実させていこうという気持ちが生まれたか。)

⑥ 評価の工夫

この資料は、テープを聴く生徒に大きな感動を与える。その感動を「主体的に生きる」意欲をもたせるところまで昇華させることがこの授業で目指すところである。指導過程を通して、どの程度達成できたかを知るために、以下の3点にそって、評価を行った。

(ア) 座席表

事前に行った『生徒の実態把握』をもとに、座席表を活用した。この座席表からは生徒一人一人がもっている「生命の尊重」にかかわる気持ちや、考え、意識、行動傾向などのよさを発見する視点からできるだけ詳しくとらえておいた。また、授業を進める中で座席表を利用することにより意図的に生徒を指名することを考えた。

(イ) 机間指導

生徒がワークシートを書いている間は、机間指導を行った。これを通して、生徒が本時の「ねらい」にどれくらい近づいているかをとらえた。また、とらえたことをもとにして、生徒を意図的に指名し、発表させることにより、いろいろな考え方を全体に広めるようにした。

(ウ) 道徳だより

後日、ワークシートに書かれた意見をまとめ、『道徳だより』として生徒に配布し、自分以外の人の意見を広く知るようにした。指導者としては、生徒の反応を見て「生命の尊重」に対する意識がどの程度深まっているかを確認した。

⑦ 授業記録

【導入】

「かけがえのないものとは何か」と発問したところ、「命」という答えが一番最初に生徒から出た。

【展開】

録音テープをかけた時、はじめのうちはややざわついていた生徒もすぐに集中して資料を目で追いながら聴き入っていた。

ワークシートの発問に答える段階になってすぐに書き出せない生徒が少なからず見受けられたが、真剣に考えている様子は感じられ、最終的には全員が記入をした。

②の発問に対しては、次のような場面が挙げられた。

- ・二度しか涙を見せないところ。・アイバンクにいったところ。・成人式のところ。
- ・母親の言葉。・病をおしての検定試験。
- ・受験。
- ・死ぬ寸前まで周囲を気遣ったところ。
- ・誕生日の前日に死んでしまったところ。
- ・信号機が4機つけたったところ。

③の発問では、資料から離れて、自分の考えを書くように指導し、発表さ



せた。

- どんなことがあっても死のうとは思わず、夢をもって精一杯生きること。
 - 自分のことだけではなく、周りの人のこともきちんと考えていく生き方。
 - 自分自身を大切に生きていくこと。
 - 自分のやるべきことを成し遂げられるよう努力していく生き方。
- などが挙げられた。

【終末】

「授業を受けて感じたこと、考えたこと」を書かせた。

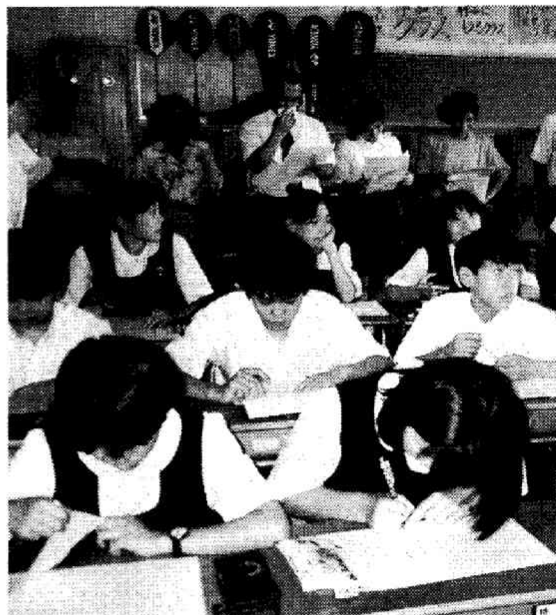
- 智君は弱音をはかないですごい。
- 智君は別に悪いことをしていないのに、死ななければならないのはかわいそうだ。
- 自分の命を大切にしているか、考えさせられた。
- 一生懸命生きて、人のために何かをしてあげられるようになりたい。
- 最近あきらめていることが多くなってきていたが、頑張ろうという気持ちが出てきた。

⑧ 考察

②の発問に対して、生徒が「アイバンク」「成人式」「検定試験受験」などと答えたのは主人公の「病気に負けない前向きな生き方」に感動を覚えたものだと考える。資料がドキュメンタリーであり、自分たちと近い年齢の青年に起こった出来事であるということが印象を強くしたものと思われる。発問③で資料から離れ、自らの考えを引き出すようにすることが重要になる。この発問をしっかりと押さえることが、この授業の「ねらい」を達成させるカギになると考えた。授業では、生徒から「夢をもって生きること」「自分も他人も大切に生きていくこと」「自分のやるべきことを成し遂げること」などの意見が多く出された。これは、資料を踏まえながら生徒自身が「生きる」ということの意味を真剣に考えた結果であろう。

終末の「授業の感想」においては、「自分の命について考えさせられた」「前向きに生きていきたい」「頑張ろうという気持ちが出てきた」など授業を通して変容が見られた生徒が少なくない。しかし、「主人公への賞賛・同情」の段階でこの授業を終えてしまった生徒もいたことを見逃してはいけないだろう。これらの生徒には学校生活のあらゆる場面において指導を続けていくことが大切である。その際には、『生徒の実態の把握』（6頁）を利用することが指導に有効であると考えられる。

また、この主題については、今後生徒の発達段階に応じて、自己の高い理想を目指した生き方を考えさせる指導が必要である。さらに、人間の生命にとどまらず他の生きものの生命を大切にすることにも視野を広げ、それらとの調和を保ちながら、人間としてどう生きるかについての自覚を促す指導が重要になってくるであろう。



3 まとめ

第1分科会では、研究主題である「人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導」についての指導を展開をするに当たって、内容項目の選定を行った。最終的に、近年社会問題としても大きく取り上げられている「いじめ」の問題、他人や、自らの命を軽々しく扱っている青少年の現状を改善するためには道徳教育として何が問題なのかを考えた。そして、生徒自身に生きる目的と実践力を身に付けさせたいという結論に達し、内容項目3-(2)「生命の尊重」についての研究を進めてきた。

精一杯
生きる

「命は大切なものである」これを否定する人間はいない。研究していく上で、その土台の上に何を構築させていくのかに重点を置いた。「主体的に生きる」ことを考えさせるためには、「精一杯生きる」ことに焦点を当てるべきではないかという結論に達し、「僕は眠らない。智君の青春」を資料として選定した。もともとがラジオのミニドキュメンタリーであったこの資料を耳にしたときに、我々の心の中に何とも言えぬ感動が巡った。その感動を生徒に伝え、心に秘める生命の躍動を導き出そうとした。この資料を使って「生きることの素晴らしさ」を全面に押し出し指導を研究した。そこで、事前の調査として、多くの教師の協力を得て、一人一人の生徒のよさやその芽を観察することに努めた。思った以上に教師一人だけでは気付かない部分が発見された。そして、授業を通して生徒一人一人を生かすための方法の一つとして活用した。ところが、「感動」をどうやって継続させ、ねらいとする価値に迫るかという難題に遭遇した。そこで、初発の感動を結論まで持続させるために、展開後段からは資料から離れての発問を構成した。

心情
判断力
意欲・態度

この「僕は眠らない。智君の青春」という題材を我々は1年生の教材として設定した。1年生で命の大切さを認識させようとした。一生懸命に頑張らなければならないことを心情面から実感させようと考えた。2年生では、その命というものを人間に限らず生命体すべてに広げてみた。それらが自然界で起こしている神秘的な事象を自分のこととして受けとめる意欲を身に付けさせようと考えた。そして、生命尊重の精神を人間形成の基盤とし、自己実現のために有意義な人生を生きようとする態度を育てようと考えた。このように、「心情、判断力、意欲・態度」の三要素を総合的に培っていくことが、「主体的な人間」を育てていくと考えた。

主体的に
生きる力

現代を生きる生徒たちは、「生命」を軽視する風潮があるといわれる。しかし実際に研究授業を重ねて授業改善を図りながら感じたことは、生徒たちの反応は教師の願いを知っているかのように素直であった。つまり、現代の生徒たちは決して「生命」を軽視しているのではない。ただ、そういう機会に恵まれてこなかっただけである。教師側が「命」を観念的なものとしてとらえ、道徳の授業の題材としてはあまり取り扱ってこなかったことが、生徒一人一人の心の中に眠っているその思いや願いを喚起させられなかったことにある。今後の課題は、要となる道徳の時間での「命」を大切に学習を充実するとともに、豊かな体験を始めとする他の教育活動との関連を密にしておくことである。そして、そこから生まれる「命」に対する生徒一人一人の自分なりの思いや、考えなどの「こだわり」を大切に、再び要とする道徳の時間につなげ、それを広めたり、深めたりする道徳学習を展開する。この学習を通して主体的に生きる力が一層はぐくまれるものとする。

「僕は眠らない、智君の青春」

さとし

十二月二十五日、目の不自由な方へ、「通リゃんせ基金を」これを合言葉に展開いたしましたニッポン放送の二十四時間チャリティーイベント、第十七回ラジオチャリティーミュージックソンは間もなく正午のフィナーレを迎えようとしていた。

「早く、早くこのお金を届けたい。」基金スポットとして設けられている、浅草松屋の、愛の泉に向かう増田春子さんは、はやる心にせかさながら、懸命に脚をはこんでいた。このミュージックソンが昨日の正午からスタートしていることは知っていた。けれど、この暮れの時期に、婦人物のシャツなどの製造を営む家業の手を休めることは、ほとんど不可能に近い状態だった。二十五日の正午近く、やっとのことで合間を見付けた春子さんは、ご主人正さんに追い立てられるようにして、家を飛び出した。胸には、銀行から届いたばかりのお金が、しっかりと抱きしめられている。「智、今届けるからね。あなたの貯金と保険金、ぜんぶしっかり届けるからね。」春子さんは心の中で、そうつぶやきながら冬の色の隅田川を渡った。

増田智君、バイクと空手と絵が大好きな彼が、体の不調を訴え倒れたのは、昭和六十三年二月、高校三年生の時だった。カゼからやがて胃かいようという診断。入院、そして手術。しかし、両親にはまったく違う病名が告げられていた。胃ガン、小さい頃から、肉体的な弱点といえば、車酔い程度しかもっていない息子には、どう考えても似つかわしくないこの病名に、父も母も大きくうろたえた。「何かの間違いであって欲しい。悪い夢であって欲しい。」何度そう願ひ祈ったことだろう。けれど、そんな親の気持ちをあざ笑うかのように、病魔は智君の体をむしばんでいく。繰り返される入院と退院、人工肛門を取り付ける手術の時は泣いた。そして、退院しても退院しても、また病院に逆戻りの自分の青春がさびしいと泣いた。けれど、智君が親に涙を見せたのは、この二回だけだった。元気な頃のある日、高校から帰ってきた智君が言った。「今日ね、アイバンクに申し込んできたよ。」アイバンク。天寿をまっとうした時、視覚障害者に自分の角膜を提供する制度である。やさしい子だった。夢は、人工知能ロボットを開発すること。医者がそのロボットにデータを入力し、患者が自分の症状をすべて話すと、たちどころに病気を治してくれる人工知能ロボット。目の不自由な人や病める人を常に思いやる心は、智君の描いた数枚の絵にも表れている。

その朝、智君は自分の頭を電気かみそりで剃ると言った。高校二年の時から、長期にわたるガン治療の副作用によってところどころまばらになった髪の毛を、きれいさっぱり剃り落として、晴の日に臨みたかったに違いない。けれど、なかなかそれがうまくいかない。「お母さん、剃ってよ」母親の春子さんは息子の手から電気カミソリを受け取り、ジージーとその髪の毛をいねいに剃りながら、胸の中で語りかける。「この日までよく頑張ってくれたね。さあ、初めての背広だよ。これを着て行っておいで。立派な成人だよ。」平成二年一月十五日、成人の日。智君はこうして墨田区の成人式の会場に向かった。

「この子からいろんな、こう、学ぶものっていうのは、すごくありましたね。普通にこれが元気でばーっとなー、普通の状態です、まあ、先に親が死にますよね。そういえば、まあ、これほどなんというのかな、この子とのかかわりっていうんですか、そういうことはなかったと思います。だから、病気になるって、そうですねーいろんな生活面から勉強面から、生きていますっていうことですか、そういうことはすく、まあ、学びとったっていうんですかね。私の方が。」

智君の体を最後の病魔が襲ったのは、四月のことだった。ほんの四、五日前、人工知能ロボットの夢につながる情報処理技術の検定試験を受けていた彼の体は、すでに衰弱しきっていた。病院にかつきこまれた時の血圧は十、それでも意識はしっかりしていて、お別れのためにやってくる、親せきや友達の仕事に気がつかなくて、「早く、帰れ。」と言った。

四月二十六日午前八時三十分、智君は病魔との闘いを終えて二十歳の青春の幕を閉じた。それは、二十一歳の誕生日を明日にひかえた朝だった。

数々の素晴らしい思い出、暖かい絵、ビリジョエルやバニーマニローや、そして沢田研二のアルバム、オートバイのヘルメット。智君の残してくれたものはそれだけではない。アイバンクを訪れたという智君の遺志をついで両親は、その貯金と保険金のすべてをラジオチャリティーミュージックソンに届けてくれた。金額は十七年間にわたるミュージックソンの歴史の中で、個人の募金としては最高額の五百万円。このお金で、音の出る信号機が四機たち、どこかの街角で目の不自由な人たちにやさしさのサインを送り続ける。智君は眠らない。

(ニッポン放送及び増田様の許可を得て作成)

Ⅲ 内容項目 1-(5) 「個性の伸長」についての指導（第2分科会）

1 主題設定の理由

社会の変化と
求められる人間像

高度経済成長は、日本を世界有数の豊かな国におし上げた。この繁栄を支えてきた教育の功績は大きい。経済成長が一段落し、経済・社会・政治の在り方が問い直されている現在、教育も変わらざるを得ない。たとえば、日本は福祉国家への道を歩み始めているが、これは物質的に豊かになりつつも、それに伴っていない精神を意識し心を育てていかない限り実現できない。学歴社会や知識偏重からの脱却、精神的な豊かさをもった意欲のある人間の育成、個性と創造性の伸長などが是非とも必要である。21世紀を目指し、社会の変化に自ら主体的に対応できる心豊かな生きる力をもった人間の育成が求められているのである。

学校教育
の課題

人から干渉されることを嫌い、人と接することを拒む人間が増えている。物に囲まれ、たやすく物を手にできる時代に生きてきた結果であろう。また、日本人は「自分はどのような人間か」「何をやりたいか」などを堂々と語れないと言われて久しい。このことは、自分のよさや可能性に気付いておらず、自分自身の存在価値を見出していないために自信がもてないからではないだろうか。

近年、いじめ問題や不登校の生徒も増えている。これもまた、少子化や核家族化などに一因があるように思う。マスコミによる過剰な報道も、その影響は大きい。一方で、固有の個性が認められにくい現在の風潮の中で、流行ばかりを追い求める、集団になじめない子を排除するなどの問題も多く抱えている。他の人の固有のよさを認められない人間が増え、逆に目立つだけの表面的な表現を個性としてもてはやされがちな時代である。

現実には集団の中でしか生きられない人間や集団の一員になれない人間が増つつあるが、子供たちは多くのことを受け入れることができる広く柔軟な心を本来もっている。本当の個性は、感動に出会うときに内面から発生し、育っていくものなのである。

今こそ
個性を

人にはそれぞれよさがある。自分には自分の固有のよさがある。他の人には他の人の固有のよさがある。ぜひ、自尊感情をもち、堂々と自分を語ることできる生徒を育てていきたい。自己受容・自己理解を深め、自分を見付けることが何より大切である。自分を中心に置き、過去と未来を現在と比較する。他の人に自分を、自分に他の人を重ねてみる。出会いを求め、出会うすべての対象に、前向きに自分を重ね合わせるにより、自分のよさを見付けていく。出会ったときの喜びは、自分への励み・自信、次へのステップとなり、感動的な出会いの幅を広げていく。個性とは人との関係の中でそれが生かされてこそ初めてよさとなる。互いに生かし合うことは個性を尊重し合うことである。

人間としてよりよく生きていくためには、まず自分を知ることが必要であり、特に自分のよさを知ることにより主体的に生きていけるのである。

以上の理由から、第2分科会では「人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導」として、内容項目 1-(5) 「個性の伸長」を取り上げ、内容項目のとらえ方、生徒の実態把握、資料の検討、指導方法などの研究を進めた。

2 研究の内容と方法

(1) 内容項目1-(5)のとらえ方

内容項目1-(5)は、「自らを振り返り自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を求めるようにする」(中学校学習指導要領道徳)である。

個性のとらえ方

この項目を考える上で、個性をどうとらえるかが重要である。第2分科会では、個性を「人それぞれには必ずその人固有のよさがあり、その固有のよさが個性である。よくない、好ましくないと見られる面もその段階の個性ともいえるが、本当の個性とはいえない。」ととらえ研究を進めた。

感動的な出会いと個性

個性は他と接することで内面から引き出される。他の人や自然や崇高なもの・集団や社会に主体的に向かうとき、そこには感動的な出会いが生まれ、意識的あるいは無意識のうちに個性が表れる。しかし、気持ち(内面)と表現(外面)とが合致しないことも多く、自分固有のよさを自覚できるためには、我慢や自制、関心や意欲、真善美聖などの価値への憧れがはたらくことが必要である。一つ自分のよさが自覚できると、外面が内面と重なり合って表れ、感動することができる範囲が広がっていく。感動的な出会いの幅を広くする中で、人間としての生き方についての自覚が深められ、自分自身のよさを見いだしていけるのである。

自分探しの旅

人生は自分探しの旅と言えよう。内容項目1-(5)を自分探しの旅にたとえ、以下のようにとらえた。この旅の途中で、多くの人やものに出会い、時に歩んで来た道を振り返り、自分のよさが徐々に見え、自信がもててくる。さらに伸ばしていこうとする意欲もわいてくる。そして、自分らしさを求めていった遠いかなたにある自分の理想とする姿に最終的には到達することができよう(自己実現)。個性の伸ばし方によって実現する姿は異なってくるが、大いなる可能性を秘めたすべての生徒に、個性を伸ばすための多くの働きかけや機会を与えることが大切である。

個性の花を育てる

以上述べたことを花にたとえ図に表してみると図2のようになる。いろいろな種類の種がある。栄養・水分など違った環境の中でそれぞれ発芽する。その芽は栄養や水を吸収し、太陽の光を浴び、寒さから身を守り、花を開かせる。それぞれがあらゆる花として咲く可能性を秘めている。日光の当て方・水のやり方などで、花の種類や数・色・大きさ・強さ・美しさなどは変わっていく。

この花を育てていくのは自分自身であり、手助けをしてくれるのが家庭・学校・地域の人々などである。この花は、咲かされるのではなく、自ら主体的に咲いていくのである。

一つの大輪の花でもいいし、大きくはない数輪の花でもいい。どんな厳しい環境の中でも堂々とたくましく咲く花となって育っていった欲しいものである。



〔図2〕「個性の伸長」のとらえ

(2) 各学年の指導のねらい

－第1学年－

自己を見つめ、自分のよさに気付くことで、個性を大切にし、さらに伸ばしていこうとする心情を育てる。

中学1年生の段階では、自分の「よさ」がまだ自分では理解できていないことが多い。他の人と比べて劣等感をもつことも少なくない。そこでこの段階では、自分自身を見つめ、自分のもっている「よさ」に気付くことが大切である。自分の「よさ」に気付くと自信につながり、前向きに生き生きと生活していけるようになる。他人の「よさ」をも認め、自分の個性を大切にしていけると同様に他の人の個性も尊重していこうとする心情を育てたい。

〈資料例〉「美しく自分を染めあげて下さい」

(中学校道徳の指導資料とその利用第6集 文部省)

「遠足で学んだこと」(中学校(道徳)読み物資料とその利用2 文部省)

－第2学年－

自己理解を深め、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばしてより充実した生き方を求めていこうとする意欲を育てる。

中学2年生の段階では、学校にもすっかり慣れ、後輩もでき、大人など他の人や社会に対して批判的になることが多い。批判的にものを見ることも大切であるが、この段階では得てして自己中心的な批判に陥りやすい。また、自分を押し殺して友達に同調してしまうことも少なくない。そこで、自己理解を深め、向上心を育て、個性を伸ばしてよりよい生き方を求めていこうとする意欲をはぐくみたい。

〈資料例〉「じいちゃんへ」(中学校(道徳)読み物資料とその利用1 文部省)

「森のバラード」(中学校(道徳)読み物資料とその利用2 文部省)

－第3学年－

自分の個性や適性をしっかりと把握し、個性を生かすことが充実した生き方になることに気付き、個性を伸ばして自分を生かしていける生き方(進路)を求めていこうとする態度を育てる。

中学3年生の段階では、それぞれの場面が中学校最後という思いが強く、友達と力を合わせ、よい思い出を作っていこうとする。また、進路選択を目前に控え、教科の学習に力を入れようと強く意識する時期でもある。落ち着いて自分を見つめる時間もとりにくいのが、自分の個性や適性をしっかりと把握させ、自分を生かしていける生き方(進路)を求めていこうとする態度を育てていきたい。そして、自分に合った生き方(進路)こそが最高の生き方(進路)であり、誇りをもって卒業を迎えられるようにしたいと考える。

〈資料例〉「自己観照」(中学校(道徳)読み物資料とその利用1 文部省)

「自分はいつでも主人公」(中学校(道徳)読み物資料とその利用1 文部省)

(3) 生徒の実態把握

学級担任がクラスの生徒一人一人のよさやその芽を把握し、授業を行うことにより、それぞれの個性をより引き出せると考えた。そのために、アンケート調査で一般的な傾向を探るのではなく、校内の教職員に生徒一人一人のよさについて意識（内面）と行動（外面）に分けて書いてもらった。また、生徒にもクラスメートのよいところを書いてもらった。そして、それぞれのよさをつかんだ上で、指導過程を考え、授業研究を行った。生徒の書いたクラスメートのよいところは、実際の授業の中でも活用した。

〔生徒一人一人のよさの例〕

生徒	意識（内面）	行動（外面）
S 1	何事にもまじめに取り組もうとする。ムードメーカー。人なつっこい。	授業、諸活動において雰囲気活性化。人を助ける。
S 2	意志が強い。まじめ。穏和。忍耐力がある。	落ち着いて行動する。何事にも熱心に取り組む。
S 3	順序立てた考えをする。感性豊か。積極的。	クラスをまとめる。何事にも意欲的に取り組む。

(4) 指導の工夫

① 資料選定の観点

第2分科会では、内容項目1-(5)「個性の伸長」の指導に用いる資料選定のための基本的観点として、中学校指導書道徳編（平成元年3月 文部省）に示された内容を踏まえるとともに、次の諸点に留意しつつ選定した。

(ア) 生徒の実態に即したもの。

(イ) 生徒が共感しやすいもの。

(ウ) 生徒一人一人が個性を生かして感動を覚えるもの。

(エ) 生徒がねらいとする価値を自覚し、実践しようとする意欲や態度を育てられる内容のもの。

以上の観点で資料を収集し、検討した結果、文部省中学校道徳の指導資料とその利用第6集所収の「美しく自分を染めあげて下さい」（サトウハチロー作）を選定した。

② 授業の構想

内容項目1-(5)は「主として自分自身に関すること」の中に示されている項目である。一人一人が自分のよさに気づき、さらにそれを伸ばしていこうとする心情を育てることをねらい、次のことを試みることにした。まず、あまり意識せずに自分自身を見つめ、素直に自分を表現させるために「マインド・クロッキー」という手法を用いた。また、自分のよさを知る上で他とのかかわり、友達からの指摘も重要であるので、事前に生徒に書かせた「クラスメートのよいところ」の本人について書いてあるもの（自分のよいところ）を一人一人に配布した。さらに自分自身で自己を見つめ、自分のよさを伸ばしていこうとする意欲を高めるために、終末でサトウハチロー氏の詩を掲示・朗読した。

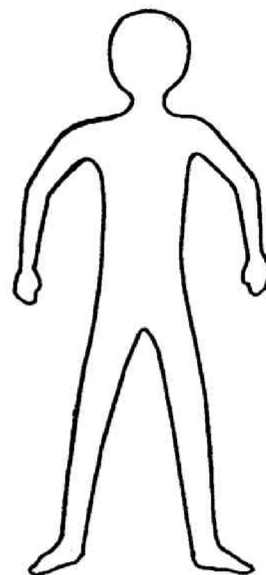
③ 指導方法と指導の工夫

ゆっくりと自分を見つめられるような授業になるように留意し、実際の授業では生徒も教師も顔を上げて行える授業を試みた。そのため、資料をプリントせず、ワークシートなども使用しなかった。

(ア) 導入における工夫

1時間目に行ったマインド・クロッキーが2時間目の導入に当たるが、2時間目の最初に全員が描いたマインド・クロッキーを見せ、授業への関心を高めた。

自分自身を、特に自分のよさを言葉にして発表するのは難しいが、この手法なら自然に自分自身を見つめられると考えた。また、より発表しやすくするために教師自身も生徒と同じマインド・クロッキーを行い、導入に活用した。



〔図3〕 マインド・クロッキー

“マインド・クロッキー” 自分の内面を色や形に表現するもの。今回用いたマインド・クロッキーは、人型の用紙を配布し、自分自身を表す色を自由にぬらせた後、自分の使った色やその色を使用した理由などを書かせた。

(イ) 展開における工夫

展開の始めにマインド・クロッキーを使い、色のイメージを発表させた。発表することとその発表を聞くことから、一人一人が違った表現をしているが、それぞれに違ったよさ（個性）があることに気付かせた。

次にあえて発表しにくい「自分のよさは何か」を発問した。この段階では、まだ堂々と発表できる者はほとんどいないと予想した。

この後、事前に用意しておいた「自分のよいところ」が書かれている紙を一人一人に配布し、読ませた。自分のよさ（個性）に自信がもてるものや意外なものがあるはずである。

終末が余韻をもって終われるように展開の最後に教師の説話をを行った。

(ウ) 終末における工夫

ここで資料の詩を黒板に掲示し朗読した。その後、あえて何も発問せず、コメントもせず、余韻をもたせて授業を終了させた。

この詩は教室に掲示し、以後も一人一人が個性を伸ばしていこうという気持ちを高められるようにした。

④ 資料の内容

本資料は、サトウハチロー氏の詩である。人は生まれた時は白で、自分に厳しく生きていくことですばらしい色、輝きのある色になる。より美しく自分を染めあげてくださいとエールを送っている。

(5) 指導事例（第1学年）

① 主題名 「個性の伸長」〈内容項目1-(5)〉

② 資料名 「美しく自分を染めあげて下さい」(サトウハチロー)

(文部省「中学校道徳の指導資料とその利用第6集」所収)


③ 主題設定の理由(省略)

④ ねらい

自己を見つめ、自分のよさに気付くことで、個性を大切にし、さらに伸ばしていこうとする心情を育てる。


⑤ 指導過程(2時間扱い)

【第1時】「自分自身を見つめる」

	学習内容と主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点(評価の観点)
導入	1 本時の作業についての説明を聞く。	○ 本時の作業に興味を示す。	○ 自由な作品になるように簡潔に説明する。
展開	2 マインド・クロッキーを行う。 ① あなた自身を色で表すとどのような色ですか。思う色を自由にぬってください。 ② 用紙に書いてある質問に答えてください。	○ それぞれの作業を進める。 	○ 進める手順のみ示し、見本を見せずに自由にぬらせる。 (自由にぬれたか) ○ 次時に名前がわからない形で全員の作品を発表することも伝えておく。
終末	3 本時のまとめをする。		

【第2時】「自分らしさ、自分のよさを知る」

	学習内容と主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点(評価の観点)
導入	1 前時に描いた全員のマインド・クロッキーを見る。	○ 作品に対して自由に反応し、本時への関心をもつ。	○ 模造紙にはっておいた作品を一斉に掲示する。 ○ 生徒のつぶやきに耳を傾け、その言葉を繰り返すことにより本時への関心をもたせる。 (関心が高まったか)
展開	2 マインド・クロッキーを見て、考える。 ① 先生の描いたものはどれでしょうか。 ② 自分の作品を説明してください。	○ ザワザワしながら探す。 ・赤は燃える気持ち ・青はさわやかな感じ	○ 教師の個性に注目させて、探させる。 (教師の個性に目がいったか) ○ しばらくした後、どれであるかを示し、その説明をする。 (発言しやすい雰囲気になったか) ○ 生徒の発言や周囲の反応に対して補助発問をして話し合いを深めている

<p>展 開</p>	<p>〈補助発問〉</p> <ul style="list-style-type: none"> • なぜ〇色はそういうイメージなのでしょう。 • 他の人はどのようなイメージをもっていますか。 <p>③ 「白」についてどのようなイメージをもっていますか。</p> <p>④ 作品全体を見て、どんなことを感じますか。</p> <p>3 自分のよさについて考える。</p> <p>⑤ 自分のよさを発表してください。</p> <p><input type="checkbox"/> 「自分のよいところ」を読み、そうだと思うものに〇、意外と感じたものに△をつける。</p> <p>⑥ どう思った。</p> <p><input type="checkbox"/> 教師の説話を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 純粋なイメージ • 何もない • 清潔 • 始まり • 一つも同じものがない • それぞれの特徴が出ている • 特にない • 元気で明るい • 恥ずかしくて言えない ○ 配られたものを興味をもって読み、〇△をつける。 • 意外なものがあつた • 思ったとおりだった • うれしかった • 数が少なくて寂しかった ○ 自分のもっているよさに気付く。 ○ 自分が自覚していないよさがあることに気付く。 	<p>く。</p> <p>(いろいろならえ方や感じ方があることに気付いたか)</p> <p>○ 否定的にならないように配慮する。</p> <p>○ 「白」に注目させることにより、終末の詩とのつながりをもたせる。(白に対するイメージができたか)</p> <p>○ それぞれの作品のよさに注目させ、人それぞれがみんなよさを持っていることに気付かせる。(それぞれがよさをもっており、みんな違ってみんなよいことに気付いたか)</p> <p>○ 自分のよさが言いにくいことに注目させる。(言いにくいことが再確認できたか)</p> <p>○ 事前にまとめておいたものを一人一人に渡す。(自分のよさを見つめられたか)</p> <p>○ 思い思いに発表させる。(自分のよさに自信をもてたか、新たに発見できたか)</p> <p>○ 意外だと感じるものも自分のよさであること、数や量は関係ないこと、まだ自覚していないよさもあることを踏まえ、ねらいにせまる説話をする。(自分のよさに自信を深めることができたか)</p>
<p>終末</p>	<p>4 資料「美しく自分を染めあげて下さい」を聴く。</p>		<p>○ 黒板に掲示し、感情を込めて読む。</p> <p>○ 特にコメントせず余韻をもって終わる。(静かに自分を見つめ、個性を伸ばしていこうという気持ちになったか)</p>

⑥ 評価の工夫

「自己を見つめ、自分のよさに気づき、それを伸ばしていきたいという心情が育ったか」を本時の大きな評価の観点として設定した。一つ一つの評価の観点は、指導上の留意点を裏から見たものにとらえ、指導過程の中に括弧付きで記した。第1時では、机間指導をして一人一人の生徒と対話をしながら観察し、マインド・クロッキーを行っている姿を評価した。第2時でも、ワークシートを使用しなかったので、道徳の時間の中では生徒の発言や表情を観察して評価した。

道徳的心情の深まりは、当然一人一人によって違いがある。特に「個性の伸長」においてはその違いが大きいので、道徳の時間後の生活においても観察し、評価した。

⑦ 授業記録

【第1時】この時間は生徒の作業が中心で、どの生徒も普段の道徳の時間とは違った内容に興味をもって取り組んでいた。教師の予想を超えた色のぬり方をしていた生徒も少なくなかった。自分を表現する色をぬってはみたが、イメージとは違い、何度もぬり直す生徒もいた。そのため、時間内に終わらない生徒も3分の1程度いた。

【第2時】前時に作成したマインド・クロッキーを一斉に提示するところから授業に入ったが、様々な反応があり、この道徳の時間への関心が高まった。自分の作品についての説明では、恥ずかしさからか積極的に発言する生徒は少なかった。色に対するイメージは、黒・赤・白などの原色に対しては同じようなイメージを抱き、それ以外の色に対しては様々なイメージを示した。後半の自分のよさについては、自分から進んで発表する生徒はなく、指名されても言葉につまってしまう者が多かった。「自分のよいところ」の紙をもらったときは、みんなその紙を真剣に読み、中には目を潤ませている生徒もいた。また、友達と交換して見せ合う生徒が一人二人と出ると、約半数の生徒がお互いに見せ合っていた。最後の詩を聞くところでは、みんなの気持ちがまとまり、全員が顔を上げ、詩を食い入るように見つめていた。

なお、道徳の時間が終了しても、うれしそうに「自分のよいところ」の紙を見せ合っていた生徒が何人もいた。



- ・遠慮がいらぬ、本音で話ができる。
- ・気軽に話せる、頼りになるって感じ。
- ・友達の悩みを自分のことと思って相談にのってくれる。
- ・元気で一緒にいるとこちらも元気が出てくる。
- ・友達を多く作れて大事にしている。
- ・穏やかでやさしいところ。
- ・明るくて頭いい。(一部のみ掲載)

〇〇(さん)のよいところ

⑧ 考察

「個性の伸長」〈内容項目1-(5)〉をねらいとした道徳の時間において、個性（固有の自分のよさ）がわかっていない生徒にどのようにして個性を発見させるか、自分のよさを口にできない、文字にできない生徒にいかにして自分のよさを表現させるかが大きな課題であった。実際に行った授業の中での、自分のよさについての発問⑤に対しても「別がない」と発言する生徒や黙ってしまう生徒が多かった。

そこで、マインド・クロッキーという手法を試み、これが有効であることが分かった。生徒は、我々の想像以上に関心を示し、意欲的に取り組んでいた。一色でぬる者、何色もの色を使う者などその表現は多様で、しかも生徒それぞれのもっている個性がよく表れていた。生徒一人一人も、今まで気付いていなかった自分を新たに発見したことと思う。

「個性の伸長」を扱う上では、自己をしっかりと見つめることが大切である。時には自分の外に目をもって自分を見ることも必要である。そこで、第2時の授業では資料をプリントせず、ワークシートも使わずに授業を行った。このことにより生徒の気がそれぞれの手元の資料やワークシートに分散することなく、生徒も教師も顔を上げ、目で気持ちを感じ、伝え合いながら授業を行えた。生徒一人一人も自分との距離をとり、自分自身を違った角度からも見つめることができたと感じている。

「自分のよいところ」の紙に書かれた内容を読み、それぞれが自分のよさを再確認し、自分に自信がもてたはずである。また、「意外なところが多かった」と自分で意識していなかった自分のよさを新たに発見した者も多かった。その後「この手紙は私の一生の宝物になる」と書いた生徒もいた。

詩「美しく自分を染めあげて下さい」を読むことを終末としたため、この詩に対する生徒の感想は聞けなかった。しかし、その後「授業の雰囲気や和やかでよくなった」と言う教師やこの道徳の時間のことを題材に地域の意見発表会に参加し「自分の個性を見つけ伸ばしていきたい」と発表した生徒もいた。これは、自分のよさを見付け伸ばしていこうという気持ちが芽生え、他の人のよさも認めようという気持ちの表れだと感じている。

決して技巧に走った道徳の授業を行おうとは思っていないが、生徒が意欲的に取り組める道徳の時間を作っていきたいと思う。今回の授業では、生徒が構えることなく授業を行うことができたと考える。授業の翌日に書いてもらった感想の中にも「楽しい授業であった」「こういう授業なら毎日でも」というものがあり、生徒が意欲的にこの道徳の時間を受け入れていたことを強く感じた。

今回の授業研究全体を通して強く思ったことは、「よさ」について考えていくということで、お互いが気持ちよく和やかな授業の雰囲気をつくることのできるということである。とかく日常の学校生活では生徒の欠点にばかり目がいき、必要以上に注意してしまっていることを痛感した。生徒は自分探しの旅を続けているが、教師もまた旅の途中である。自己実現という同じ地を互いに目指し、同じ旅路をたどる者として温かいもてなしをしていけるようになりたいものである。

3 まとめ

人は誰でも自分らしく生きたいと願っている。「自分ならではの」の生き方をしたいと思っている。自分固有のよさ（個性）を発見できると生きる意欲がわいてくる。前向きに自分をさらに高めていこうという気持ちになっていく。しかし、現実には自分の個性が発見できていないことが多い。自分の個性に自信をもてていないことが多い。自分の個性・適性をしっかりとつかみ、自分を生かしていける進路を見付け、活躍していつてくれることを願う。

本当の
個性を

今回の研究で、まず個性をどうとらえるかで苦慮した。「好ましくないことも個性と言ってよいのだろうか」「人との違いは何でも伸ばしていく必要があるのだろうか」これらを検討した結果、我々第2分科会では「人それぞれには必ずその人固有のよさがあり、その固有のよさが個性である。よくない、好ましくないと思われる面もその段階の個性とも言えるが、本当の個性とは言えない。」という結論に達した。自分勝手は決して自分らしさではなく、個性ではない。生徒の未発達面、正さなくてはならない面について適切に指導することは大切ではあるが、一人一人が心の中にもっているよりよく生きようとする願いにこたえて、共によりよく生きようとする姿勢が何よりも大切であろう。

個性を
発見・表現
させるために

また、自分自身の個性が分かっていない生徒にどのように個性を発見させるか、自分のよさを口や文字に表わせない生徒にいかにして自分のよさを表現させるかが大きな課題であった。そこで、マインド・クロッキーという手法を試み、これが有効であることが分かった。さらに、それぞれのよいところを教職員や生徒相互によって書かれたものを配布した。これを読み、自分のよさに自信がもて、意識していなかった個性にも気付いたと思う。これは一人一人の心の宝物になると考える。それと同時に、教師にとっても生徒のよさをさらに知ることができ、生徒との人間関係が温かいものになるとともに、一人一人の生徒を伸ばす視点や、きっかけをつかむことになった。

目で語り合う
道徳の時間

内容項目によっては、深く資料を読み取り、文字に表現することによって自分の考えを深めていくことが大切なものもある。しかし、今回、我々は生徒も教師も顔を上げて行う道徳の授業を試みようとした。そのため、資料をプリントせず、ワークシートなどにも書かせなかった。読み物資料の利用についても終末で用い、あえてその資料に関する発問はせず、生徒と教師が互いに前を向いて、顔と顔・目と目を合わせながら道徳の時間を終えるようにした。

個性を伸ばして
いける社会を

中学生は、人生という自分探しの旅の途中で、多くの人やものに出会い、自分が徐々に見えてくる。教師は、旅人が道を見失ったときには、共に道を探し、アドバイスのできる存在でありたいと思う。旅人を勇気付けられる人間でありたい。発達段階からして、この旅は、ときとしてつらく厳しいものであろうが、我々教師も強い意志をもって共に旅していきたいと思う。

自分を大切にできれば自殺などできない。他人を大切にできればいじめなどしない。誰にでも必ず、とても大切なその人固有のよさがある。「みんなちがってみんないい」「ちがっているからこそすばらしい」と教師も生徒も思い、一人一人の個性を尊重し、伸ばしていけるような学級・学校・社会をつかっていきたいと切に思っている。

IV まとめと今後の課題

本年度は、「人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導」を研究主題とした3年目である。今まで2年間の教育研究員道徳部会及び教育開発委員会道徳部会の研究成果を踏まえ、1年間研究を進めてきた。今年度は、現在の学校教育の大きな課題となっているいじめや不登校などの問題にも強くかかわる内容項目3-(2)「生命の尊重」(第1分科会)」と、内容項目1-(5)「個性の伸長」(第2分科会)についての指導の研究に取り組んだ。それぞれの分科会で主題が異なるため、資料の提示の仕方や授業の進め方など指導方法は違う。第1分科会では考えを深めるためにワークシートを使用し、第2分科会では目と目で語り合える授業を目指した。両分科会とも中学生という多感なこの時期に生徒一人一人が真剣に自分自身を見つめ、語る事ができたと感じている。

生徒の視点に立った
道徳の時間を
目指して

今年度は、アンケート調査で生徒の一般的な傾向を探るのではなく、職場の先生やクラスメートに生徒一人一人のよさやその芽について書いてもらい、それを座席表や名票に記し、それを踏まえた上で授業を行った。その生徒ならではのよさをあらかじめ把握していると、意図的指名はもとより、一人一人をみる教師の目が一段と温かいものになっていった。

いくら教師が素晴らしいと思った資料でも、それが生徒の実態に即していなければ生徒が主体的に取り組む授業にはなり得ない。主体的に取り組めてこそ生き方についての自覚が深まる。よさを認められることにより主体的に生きる力も育っていく。そこで、第1分科会ではラジオ放送されたドキュメントを資料として選定し、実際に録音したテープを流し授業を行った。第2分科会ではマインド・クロッキーという手法を用い、詩を資料として終末で用いた。どちらも生徒が意欲的に取り組み、自分を見つめ、考えるのに有効であったと考える。

生きた道徳の
時間を
目指して

両分科会とも生徒の発言やつぶやきに耳を傾け、生きた授業が展開できるよう柔軟な指導過程になるよう心掛けてきた。我々教師は生きている人間を相手に指導をしている。予想どおりにいかないこともあり、思いどおりにいかないからこそおもしろい。

特に道徳の時間においては、学力の進んでいる生徒もそうでない生徒も、運動が得意である生徒もそうでない生徒も人間として対等に参加できる。本来、道徳の時間は誰もが生き生きと活動できる学習の場であるはずである。よりよく生きようとしている生徒一人一人の気持ちにこたえるためにも、生きた道徳の時間の授業にしていくことが大切である。

さらに充実した
道徳の時間
にしたい
ために

常に生徒の視点に立ち、生きた道徳の授業を目指して研究を進めていく中で、生徒はそれぞれの「こだわり」をもって考え、行動していることが分かった。このそれぞれの「こだわり」をいかに道徳の時間の中で取り上げていくかが今後の課題である。

また、多くの先生が「こういう道徳ならやってみよう」と思ってもらえる研究になるように心掛けたつもりである。我々は多くのことを学び、道徳の時間は教師と生徒を近付ける時間であることを知った。道徳に前向きに取り組む教師の輪を広げていくことが、多くの人に支えられながら研究を進めてきた我々の使命であり、今後の課題でもある。